

日本図書館協会選定図書

短歌をたのしく

—作歌と鑑賞—

生方たつゑ



短歌をたのしく

生方たつゑ

結婚したら

毎月17日発売

主婦の友

●「主婦の友」の愛読者の95%は結婚しています。*結婚したら主婦の友*のキャッチフレーズどおりです。

若い女性の生活誌



毎月7日発売



●赤ちゃん・子どもの服飾・育児誌

別冊主婦の友

年6回発行

●きものの専門誌

主婦の友増刊

年2回発行

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店が本社へお申しいでください。

短歌をたのしく

作歌と鑑賞

定価 六八〇円

昭和四十三年七月二十日 発行
昭和四十七年六月十日 二十二版発行

著者 生方たつゑ

発行者 石川 数雄

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 株式会社 主婦の友社

郵便番号 一〇一

東京都千代田区神田駿河台一の六

振替 東京 一八〇 番

電話 東京 (03) 二九四—一一一

(大代表)

著者との了解により、
検印を廃止
いたします

はじめに

「花は心なり」といった世阿弥^{ぜあみ}の深い洞察に、私はつねにびしり／＼と鞭うたれていきます。それは「歌うことは心なり」ということに強い鎖をつないでできますから。

くらしの中で「花」をうしなったら？ 「花」のある窓がなかったら、私はもっと荒ん^{すさ}だ別の人生を歩んでいたのではなかったか？ と思うことがあります。

短歌という花への希求があつたがために、私は、どのような忍耐づよい生活からも逃げようとはいたしませんでした。悲しいとき、短歌をよむことによって、私の心の窓は明るい灯をとぼすことが出来たとも申せましょう。

思えば、長い作歌の時間を持ちしものかなと嘆息いたしますけれど、新聞や雑誌におよせくださる短歌愛好者の熱心な「よびかけのこえ」をききながら、私は私のおつてきた道をふりかえり、私自身の息づかいを見るような思いをもつのです。

短歌という「心」をのべあう詩型を愛しあう人々とともに、というより、みずからのくらしの明るい窓をもとうとする人々とともに、私はあやうい現代の雑沓^{ざつさ}の中にも紛

れていかぬ「何」かをもちたいとひたすらねがうのです。

豊かなくらし、貧しいくらし、奈落^{ならく}にあえぐような切ないくらし、歓喜におどるようなはなやいだくらし。様相はちがいましうけれど、人は「思う」姿勢からとき放たれません。思うことは愛することであり、知ることにもつながります。私は短歌をつくる、また作ろうとする未知の人々をもふくめて、一緒に心を明るくする窓をもつために歩んでまいりたいのです。この本はそのいのりの中で書きつづりました。出版をおすすめてくださいました主婦の友社に厚く御礼申し上げます。

昭和四十三年春

生 方 た つ 糸

目 次

はじめに	1
I 短歌を作る前に	11
私が短歌を作りはじめた頃	11
短歌の歴史を	17
短歌のいろいろ	21
一、叙景歌	22
二、抒情歌	27
三、生活の歌	35
四、思想の歌	44
II 短歌へのいざない	57
感動から思索へ	57

III

素材への魂入れ	59
言葉の選びを	61
もう一人の批評者を	63
生きる条件(実作について)	67
短歌を生かすためのルール	78
少年のうたに	78
思いをていねいに	79
情感を入れて	80
心はうごきながら	81
切除をどうするか	83
心理をよむとき	84
感覚と表現と	85
『幸せ』をうたうとき	87
人を待つ	88
「農法はこれ」という言葉	89

あいまいな部分	90
視点の統一を	92
嬉しいときにも	93
心の伝達を	94
かそけき音も	95
目的をいたわって	97
鮮度と階調	98
戦いということ	99
率直であること一つ	100
震災の日の思いを	101
心に食いこむ言葉	103
IV	
技 巧 と は	105
たくまぬ表現を	105
句切れのこと	106
字余り、字足らず	109

比喩の生かし方……………112

V 追求の方法―歌会と吟行―……………114

歌会について……………114

吟行会の手びき……………118

水郷を行く……………119

夏の花……………127

夏の動物園……………128

作歌と読書のこと……………129

VI 私の作歌ノート……………139

美しい宿命の中で……………139

にんげんの色を……………140

秋に賭ける……………141

秋の花のころ……………142

思いの深さ……………143

目 次

VIII

秀歌鑑賞

181

悲しみの波

178

遠い夢

172

黝い潮の幻想

167

野の仏たち

161

みずうみと愛と

155

秋山ゆけば

154

VII

自歌自註

154

暮らしの中の心を

152

手紙の季節

151

草も花も

150

あふれること

148

三月の詩

147

脱皮ということ

146

私の中に花壇を

144

IX

古典の秀歌	181
現代の秀歌	186
女性の秀歌	190
暮らしの中の秀歌——投稿歌の中から——	203
現代歌人の系譜と歌壇	209
源流について	209
自然主義的潮流について	212
社会主義的潮流について	213
新浪漫主義のうごき	214
系譜について	215
歌壇賞について	227

私が短歌を作
りはじめた頃

I 短歌を作る前に

私はよく人から、「何で短歌を作りはじめたのですか」という質問をうけます。その時、私ははばかりもなく、

「心の支えが欲しかったからです。心の支えは他人がしてくれるものとばかり思っていた甘さが、やっと家庭の苦勞をして見て気づくことが出来たからかもしれません」

と、言うことを恥じてはおりません。私は、かなしいことながら短歌を作り、短歌を勉強しはじめたのは晩^{おそ}すぎたのでした。東京の学生生活ののんびりすごし、学究そのものに没頭^{めっとう}してすごせた時間を遮断して、家庭生活にとびこんだのでした。女のくらしとしては至極当然である順路をふんだのにはちがいありませんが、大学をのうのうと出た私が、地方の旧家の嫁として果たさねばならぬ仕事は、あまりにも喰いちがいの多いものでした。私は、寒暖計が示してくれるオーブンで菓子焼いた生活と、炭火を七輪で起こして、やっとその火によって煮たきをしなければ

ばならない生活の方法の差や、舅しゅうや姑しゅうとめや義弟、義姉の中で、嫁として敏感に感じとった感情の切なさなど、そのような事に触発されて短歌と結びついたのでは決してありませんけれど、みずからの心が時として「空虚」そのものになっていることを、いたく切ないものに思う日がありました。冬が来れば雪ごもりの仕度を、凍りついた水甕みずがめの氷を割って朝の寒い厨くちやにたつことも決していはいたしませんでしたけれど、

「人は食べるのみに生くるにあらず」

といった先人の教えが、家庭の主婦の私をいたく責めさいなみ、安情に慣れていく歳月へ鋭い鞭むちをうちおろしてくれました。

鞭をうたれながら、私はそれでもなかなか自分の心のより場ともなる「思索」や「救い」は得られませんでした。迷いの多い、業ごうの深い人間だからでしょうか。

約十年の歳月がたちました。

父われの世わざに迷ふ寂しさを知らざる子らの手をひきあそぶ

中村 憲吉

の一首にめぐり合って、私は私の世すぎの拙劣さを思いつめ、そこでようやく私には、小さい手帖ていしの一頁に歌をかきとめる毎日がはじまりまし

た。すでに長女は小学校へ通うようになっていました。憲吉の「父われ」が「母われ」に置きかえられました。

「思ひつめる姿勢」

がやっと私に、生活の位置、心の位置をさだめてくれたとも申せましようか。縁あって私は月に一度、群馬県沼田から上京して師の今井邦子先生のところへ通いはじめましたが、褒められるような作が出来ようはずありません。叱られて汽車にゆられて帰るときなど、救いとして作ったものが、何とかなしい反故同様にしかないのだ、という悲しみが心をひたしました。

長い手さぐりの時間がすぎたとは言っても、朝から晩までゆたかに本を読むくらしは私にはめぐってきませんでした。家の者の寝しずまったあと、冬の夜に部屋の中の花甕の水が凍るかすかな音をききながら、かじかんだ手で鉛筆をにぎりしめ、短歌を書くことに自分を投入していく日をもつのでした。

戦争がはじまってからも、防空ズキンを持ちながらも、私は汽車の切符を手に入れて、東京の先生のところへ短歌の原稿を持参して批評をうけつけました。途中で空襲警報に逢いながら、私は最後まで、いわば戦いが終わるまで、一日も欠かさず師の批評をうけることを休みません

でした。いつ死ぬともしれぬ親子三人であることの決意もさることながら、私は荒涼として、ひもじい月日を送ることにのみ身を没していききれない自分の業の深さに驚く日もありました。

しかし、私はその日をもったがために本当は「救われた」のだと今は、はばかりもなく言い切れるのです。

「歌をつくるより田をつくれって、昔から言いますよ」

冷笑をいくど耳にしたことか。それでも私は、精神の田を作ることを知りえたのだ、という誇りが、この屈辱にも耐える力をあたえてくれました。

現代のように書籍が思うように手に入りませんでしたし、会合は勿論、歌誌も一、二を数えるほどのものでした。やっと手に入れた本を、二度も、三度も、飽きるほどよみ返したのも、「ひもじい月日」なるがゆえに得られた「ものを大切に」の教えをうけたようなものかもしれません。

きびしい中にたゆたいたいづづけたおかげで、あるいは私のような、ひよわなものが生きつづけたのです。くずおれてはならないという、あこがれへの忍耐が、私を救ってくれたのです。短歌をつくっていなかったら、私の人生はまた別のものになっていたのにちがいませんが、私